

月報 岡崎の教育

昭和 5 9 年度

No.131 ~ 142



4 月 号

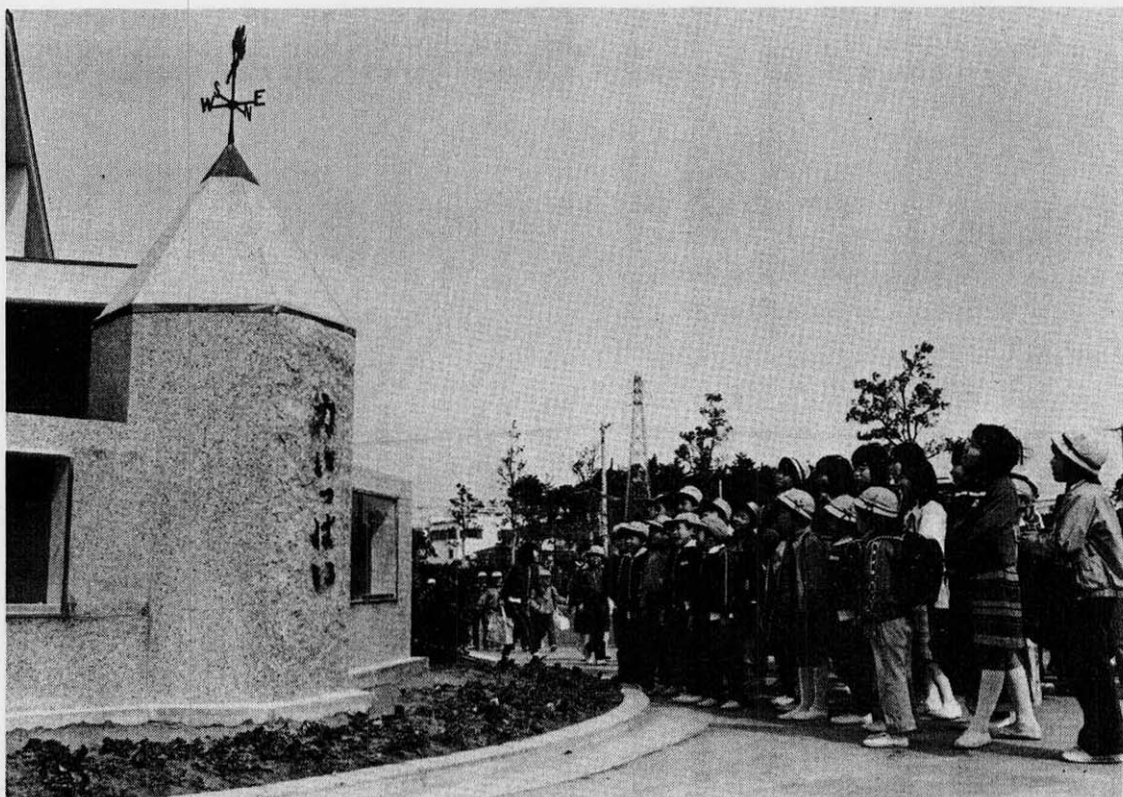
昭和59年4月1日

編集／発行

岡崎市教育委員会

「この中に、卒業生の書いた希望
がしまつてあるんだって。」
「誰の絵が最初に張られるかな。」
「今日の行事がわかっていいね。」

エンピツ型の校訓塔は
上地っ子たちの話し声に
耳を傾け 夢を育くむ。
そして
力いっぱいがんばれと励ます。



(胸ふくらむ2年目の春—上地小)

「博、大きくなったら、何になるつもりだ。」と父に言われた。大正九年、私の九歳くらいの時である。私は即座に「絵かきになりたい。」と答えた。もちろん、絵かきがどんなものであるか、どうしたらなれるものか、全く知るよしもなかった。父はひどく怒った。絵かきなどになれば、一生生涯貧乏で、乞食同然だぞ。それでもなりたければ勘当するより仕方がない。」と叱られたのである。

旅絵師と私

倉光博文



父は裁判官が好きらしく私に検事になれと勧めた。岡崎の裁判所へ傍聴に行っていた父は、裁判官、特に検事にすつかり惚れこんでしまったのであろう。裁判官になるのであれば大学へも進学させるとも言った。このように親が息子にかけると期待は、今も昔も変わりはないのである。

私の育ったころ、農閑期になると必ず

やつて来る旅の絵師があった。絵師と言うより表具のできる絵かき、または絵のかける表具屋と言った方が適切かも知れない。村の人たちは「華山サ」と呼んでいた。どこから来た人か、どんな経歴の持ち主か今もって解らないのである。華山さんでもなく、もちろん華山先生ではない。華山サという呼称は、あまり尊敬されていたとも思えないのである。竹行李の中に、表具に必要な道具類、書画に用

いる筆墨硯、僅かな着替えの衣料を入れて、家から家へ泊り込みで仕事をするのである。

ある年、私の家にも「華山サ」がやってきた。およそ十日間くらい泊り込んで、黒くなった襦や、破れた屏風を張り替えてくれた。張り替えが終わると、父の求めで、襦には漢詩を、屏風には南画風の水墨画をかいてもらったのである。

私は糊の臭いのする部屋で「華山サ」のかく書や絵をものめずらしさも手伝わじつと見ていた。何のためらいも、気取りもなく、無造作にかく書や絵が、私にとつては全く驚きであった。空んじていたのか手本も何もなしに、私には読むこともできない長い漢詩や絵が流れるようにでき上がって行くではないか。私は次第にこの人が偉く見えてきた。世の中にはこんな職業もあるのか。情報皆無の山村の私は、強い感激を受けたのである。父に「絵かきになりたい。」と言ったのも、こんな体験があったからであろう。

村の人も父も絵かきと言えば、おそらく華山サに代表された貧乏な人を想像したのであろう。今思えば、父の怒りも当然であったと思うのである。

そんなことがあって間もなく、酒好きの父は胃潰瘍のため四十二歳の若さでこの世を去った。私の十一歳の時である。岡崎中学の終わりに近いころ、ふとしたことから仏画家、丹羽宗五郎、丹羽芳松父子に会う機会を得、静かで端正で厳肅な作品と、両氏の清らかな実生活に惹かれて、日本画を勉強する為に東京美術学校に入る決心をしたのであるが、なぜか幼い日の旅絵師のことが、残像として心の奥に残っていたのである。父の遺志に反して進んだ人生であるが、強引に心の中の小さな芽生えを育ててきた私には、たとえ画家として志を得なくても、後悔をすることはないのである。

(日本画家)

甘言苦言

家庭訪問



学級づくりに位置づけて

矢作西小学校

野村正巳

「ぼくの小犬、かわいいんだもん。」
「ほう、何匹いるの。」

「五匹、みんなぼくになつていて、家へ帰ると、ぼくに寄ってくるよ。」
学校ではほとんど話をしない好夫が、小犬のことを夢中になって話す。その話の終わらぬうちに好夫の家まで来てしまった。

家庭訪問というと、私はできるだけ子供と共に家まで行くことにしていた。道道かわす会話の中に子供の心があり、訴えがある。一対一、あるいはそれに近い時、子供たちは実によく話をする。そして、そこでの会話によつて子供を知り、心のふれあいをはかり、翌日からの学級づくりに生かしていこうと考えていた。学級もまだおちつかない四月の家庭訪問は、子供の名前も十分に覚わっていないというところで形式的に流れ易い。しかし、準備をし、学年当初の自分の学級づ



和ろうそくづくり

磯部 孟 位 氏

ろうそくには、日本ろうそくと西洋ろうそくがある。それぞれ、和ろうそく、洋ろうそくとも言われる。

日本ろうそくは、ろうを原料として古くは鎌倉時代から作られたといわれる。木ろうは、ハゼの実からとる黄色のろうが原料となる。

一方、西洋ろうそくは、パラフィンを原料としたもので、明治になってから作られるようになった。いずれも灯として使われるが、前者は植物が原料であるのに対して、後者は、鉱物が原料という違いがある。

ところで、お訪ねした磯部さんは、六

代目。一貫して和ろうそくを作ってみる。昭和二十四年に先代が亡くなられて以来、家業を継いでみえるので、この道三十五年ということになる。

「最初は、家業を継ぐとは思わなかったで、父に教えてもらったことはありませんでした。ところが、急に始めることになって、父や職人がやっていたのを思い出して、見様見まねで始めました。」

「最初は、ほんとに作り方がわからなくて苦労しました。わからんところがでてくると、名古屋へ行つて、作っている手つきを見て技術をおぼえました。」

と、当時を思い出すかのように、淡々と話された。和ろうそくは、芯となる紙にろうを塗っていくという単調な仕事なので、三十五年もやっていると、思えば思いのままのものができるといふ、と問いかける

。「日曜日以外、毎日作っています。今日は良いものができた満足の日はいままで何日あったでしょうか。」と真顔で言われる。

近頃、ろうそくと言えば、白っぽい洋ろうそくが多い。手間もかかり、単価も高つくつ和ろうそくだけを手がけてみえるのはなぜですか、と厳しい問

いかけをしてみると、「今、手づくりの和ろうそくを作っている人は、日本で十人ぐらい。岡崎では私をいれて二人だけです。私は、この伝統の火を絶やしたくないのです。」と、毅然として話された。

「和ろうそくも機械化できないことはないが、手づくりのものは、炎が激しく赤と燃え仁王のように炎が騒ぐのです。」

炎の美しさ、神秘性に魅せられた職人、それが磯部さんと言えよう。若い頃、アメリカ映画を見ていて、十秒か十五秒といったわずかなシーンであったが、自分の作ったろうそくが燭台に立っているのを見て、こんなに感激したことはないとも話された。

敢えて人づくりに話を向けると、同じような和ろうそくを百本作ろうと思ってもなかなかできない。しかし、なんとかしてはと、精魂込めて真剣に取り組めばそれに近づけることができる。人づくりも、なんとしてもという職人根性が、と、控え目に話された。

教育、この根性こそが今に大切と感じ入りつつお別れをした。

〔生年月日 昭和四年十月三日〕
〔住 所 八幡町一の二七〕



くりの一環と受けとめて行うとき、大きな成果を期待することができ。

四月の家庭訪問はあくまでも自分の学級の子供をつかみ、教育効果をあげるために計画的に行うものである。

心は普段着で

葵中学校

神 原 豊

「小学校の先生には気楽に話ができだが、中学校の先生にはどうも。」

これはある会合で隣合わせたお母さんの声である。一方、家庭訪問で会ったお母さんが、開口一番、

「先生とは初対面のような気がしません。」と言われたことがある。これは学級通信のおかげであつたわけであるが。

新年度が始まり、家庭訪問シーズン。先生と親の最初の出会いである。第一印象が以後のつながりを大きく左右する。

両者が気楽に話し合えるようにするためには、まず先生の姿勢こそ大切である。担任として聞きたいことはたくさんある。

生育歴、健康状態、生活態度、学校や担任への要望等々、まず聞く耳をもって臨みたい。しかし、単に聞くだけではなく、自分の学級経営の方針を明確にし、親の要望をその中にどう位置づけていくか、また、親とのパイプをいかに太くするか、を考へる機会としたいものである。

片意地を張ることなく、心は普段着の訪問でありたい。

新設2校誕生



小豆坂小学校



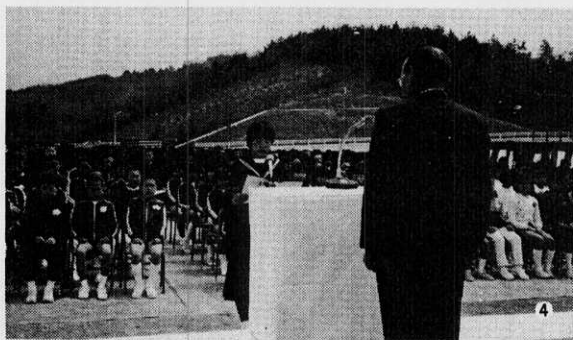
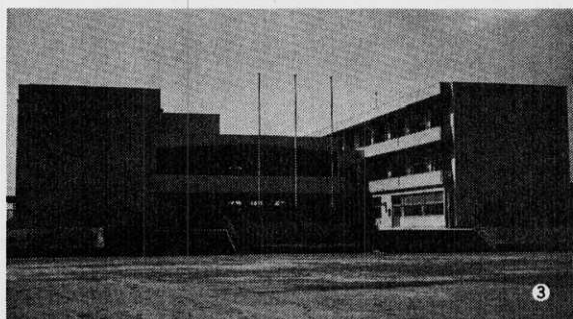
この四月、昨年の上地小学校に続いて、小豆坂小学校と新香山中学校が開校した。

小豆坂小学校は市内四十校目、小豆坂古戦場に近い小高い丘に建つ。羽根小学校・緑丘小学校の過大化を解消するもので、児童数六三三名学級数一八でスタートした。

新香山中学校はアニマルランド岡崎・カルスポセンター岡崎の二大ゾーン構想の地の北に位置する。北部開発に伴う岩津中学校の過大化と一学年一学級の香山中学校の過小化を解消するもので、生徒数六〇二名学級数十四でスタートした。

施設面でも学校の個性を出すように設計されている。小豆坂小学校の時計塔、新香山中学校の大型格納室と組み合わせた国旗掲揚塔は、そのシンボルといえるであろう。





〈小豆坂小学校〉

- ① 羽根小でのお別れ会、「いつまでも仲良くしましょう」と友情の灯を分ける。
 - ② 校地面積二二八〇六㎡、モダンな校舎外壁のタイルモザイクが目をひく。
 - ③ 緑丘小・羽根小出身の両校代表児童から市長さんへお礼のことば。
 - ④ シンボルの黒い時計塔、一目でわかるデジタル風速計もついている。
- 〈新香山中学校〉
- ① 開校を前に新入生二二四名で初清掃。
 - ② 香山中遷校式、創立三六年の歴史をもつ香山中も飛躍への新たな出発。
 - ③ 新校舎のメインである国旗掲揚塔と昇降台。
 - ④ 校地面積四四六九四㎡の新香山中、生徒代表より市長さんへ誓いのことば。



最上級生への自覚

大門小 田中 俊二

「ねえ、このお花、どうやって作るの。作り方を教えて。」
「ああ、これはねえ。ここにあげる紙を一枚一枚こらやつて開いていくんだよ。……そうそう……。」

私は、思わず足を止めた。三年生の女の子に花づくりを教えているのは、五年のM子ではないか。女の子の手にそつと自分の手をそえて、やさしく語りかけるM子。その手の動きをくいく入るように見つめる女の子。私は、ほのぼのとした二人のやりとりに胸が熱くなった。



M子は、左目が不自由で、運動や作業などはきこちなく、入学の時から問題のある子であったが、明るくひょうきんな面があり、みんなを楽しませてくれた。自分がみんなよりどんなにおくれている、マイペースで精一杯がんばるといったところがあった。

そんなM子だが、今まで学級の活動に積極的にかわかるということはなかったし、それどころか、みんなに手伝わってもらったり、心配してもらったりすることが多かった。ところが、今目のM子はちがっていた。

本校では、開校以来、たてわり活動を行ってきた。オリエンティング大会、大門カーニバル、ランチルーム会食など……。そして、卒業間近には、たてわりお別れ会を開いている。ここで、今まで六年生がグルーブの中心だった活動が、五年生主体にかわる。五年生にとっては、大きな立場の転換なのである。たてわり活動は、学年のたてのつながりを深めるとともに、上級生のリーダー意識を育てることもできる。学級の中では、どうしてももうずもれがちなM子が、たてわりお別れ会の準備では、低学年や中学年の間に入

て、自信にあふれた行動をみせてくれた。

これから最上級生になるとするこの時期に見せてくれた子どもたちのやる気。やつとエンジンがかかっていたことを実感としてとらえることができ、新年度に向けて、確かな手ごたえのようなものを感じた。この子どもたちといっしょに、これから自分もがんばらねばと、改めて刺激された。



心にとどく指導

美川中 鳥居 弘子

のこただ。
「先生、そのジャージ、もういいわ。I子にあげるわ。」
「どうしてなの。ちゃんと洗ってあるからきれいだよ。」
いくら言ってもE子は受け取らうとしない。どうやらI子を嫌うのこたらしい。

ジャージを貸してくれた時のE子は、ひどく嫌がる様子もなかったたので、私は驚いた。それと同時に腹がたつた。(I子のことをみんなは理解していく)。そう思っていたのは自分だけだったのかという気がした。I子には自分一人では、できないことも多くあったが、そんなI子を助けてくれるのも今までの。以前に同じ様な事があった時も保健室へ連れて行ったりしていた。I子もクラスに慣れるにつれ、近くの子の背中をついたりして意志表示をしたり、追いかけてこなどをしていた。私はI子が一人で行くことが少なくなつたなど安心していった。

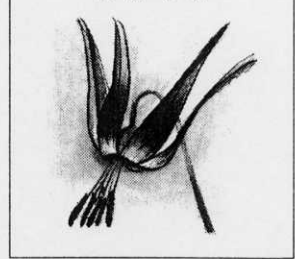
I子についての配慮がまだ足らなかつたことを反省して、授業後クラスで話し合いをした。話し合いでは、今までのように私が一方的にI子にこうしてほしいと言うのではなく、それぞ



れの子がI子のことをどう思っているか自由に言わせた。最初はI子への個人攻撃を心配したが、それもく自分たちの悪い所はI子に謝る様子も見られた。E子もその後職員室へ来て、「先生、私の考えがまちがっていました。」

と言ひ、ジャージを持って行つた。生徒の話聞きながら、今日のことは、私の「弱者保護」という言葉での、一方的な指導によるものではないかと思つた。このような奥の深い問題に対して、私の今までの指導、行いは、生徒の心をゆり動かすようなものであつたであろうか。今後は、生徒の心までとどく指導のできる教師を心がけたい。

お知らせ



〔寄贈刊行物・資料等〕

- ◆感動ある授業の創造 緑丘小 B5 三〇ページ
- ◆おおぞら 第八集 緑丘小 A5 一一〇ページ
- ◆社会科授業実践記録社会科部 B5 四六ページ 孔版印刷 野村正巳

新書刊 四〇ページ

- ◆ともに育つ 愛教大附属養護 変型B5 七七ページ
- ◆青年部白書 岡教組青年部 B5 二五ページ
- ◆生平のむかし 城殿輝雄 A5 三二四ページ
- ◆昭和58年度研究紀要 岩津小

B5 一三二ページ

- ◆フィールドワーク手引書等 2集 中学校社会科部 B5 孔版印刷
- ◆学校文集 みしま 三島小 A5 八四ページ
- ◆生物観察の手びき 生物サークル B5 五二ページ

昭和五十九年度 学校教育の視点

心のかよい合う教育を

教育は所詮、「教師その人」にある。

教師は、常に自らを磨き、見識を深め、教える専門職としての力量を高める努力が何より肝要である。

一方、教師には人間的魅力と子どもに捧げる情熱、使命感が強く求められている。

岡崎の教師は、今日の教育の状況を正しく認識し、校長を先頭に全校一致の指導体制をとり教育者としての使命を果たさなければならぬ。

そして、子どもと教師の間に敬愛の固い絆で結ばれた真の信頼関係を確立して、父母と社会の期待に応えたい。

指導の重点

- 一、教師と子ども、子ども同士、心のかよい合う学校づくりを努める。
- 二、基礎・基本をおさえ、わかる楽しさ、できる喜びを味わうことのできる授業研究に努める。
- 三、礼節を重んじ、自らを律することのできる児童・生徒の育成に努める。

■松下視聴覚教育研究助成校に

今年も岡崎から四校

松下視聴覚教育研究財団の募集した第10回（昭和59年度）視聴覚教育研究助成校に今年も四校が選ばれ、来る五月四日、東

京で贈呈式が行われる。中でも六ツ美中学校は、全国で二校しかない指定課題部門に選ばれた。助成校は次の通り。

- 〔指定課題・二年継続研究〕
 - 岡崎市立六ツ美中学校（自由課題・一年研究）
 - 岡崎市立常磐南小学校
 - 岡崎市立山中小学校
 - 岡崎市立 南中学校
- 県芸術文化選奨文化奨励賞に六ツ美北部小
 - 昭和五十八年度の県芸術文化選奨文化奨励賞を六ツ美北部小学校が受賞し、去る三月十日、県庁で表彰された。
 - 六ツ美北部小学校は、「歌ごころを大切に」を合いこばに音楽教育に力を入れ、NHKやCBCコンクールでは毎年、優秀な成績をおさめている。
 - 全国各地から、美しいハーモ

ニーを求めている参観者も多い。

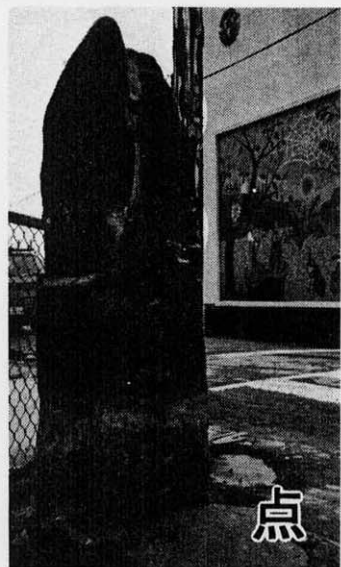
■期待の新任教員 五十一名

- 〔小学校〕 一八名
 - ▼梅園小 岡田久美 緑丘小 南野薫 岡崎小 曾我真由美 竜美丘小 武田里乃 井田小 長坂寿子 生平小 近藤昭厚 常磐小 岩村尚美 興殿小 鈴木秀一 細川小 杉浦敦子 岩津小 平岩明美 大樹寺小 山口政之 大門小 加藤喜代美 矢作東小 坂田修子 矢作南小 奥田恵子 六ツ美中部小 鈴木佐代子 六ツ美北部小 板倉陽子 六ツ美南部小 浅井三枝子 小豆坂小 鳥井佐江子
- 〔中学校〕 三三名
 - ▼甲山中 大西和夫 山口直純 小林純子 美川中 坂本雄二 酒井洋一 小坂芳正 南中 梅田康典 田中宏子 山本恵巳子 竜海中 上川康子 太田智子

■新任教師のつどい

三月二十七日から二十九日まで三日間、五十九年度新規採用予定者のつどいが少年自然の家で開かれた。主な内容は次の通り。

- 〔第一日〕
 - ▽講話（浅井千代子校長）▽講話（山浦昭雄教諭）▽実技（ひらがな・数字の書き方▽懇談会（先輩と語る）
- 〔第二日〕
 - ▽講座（金子一元教諭）▽実技（板書の書き方）▽体験発表▽講話（太田清美指導部長）▽実技（オリエンテーリング）▽実技（孔版のしかた）
- 〔第三日〕
 - ▽映画（岡崎の教育）▽講話（岸田達夫校長）▽講話（山本昇校長）



点

所在地一岡崎丸山町

からす神社へ二丁

男川保育園の東、大壁画と対面して、作手街道沿いに背丈ほどある自然石の道しるべがある。「からす神社 二丁」と刻まれている。

加良須神社は美川中学校の南隅にある小さな神社である。こんもり茂った森の中に赤白ののぼりが何本もたっている。

この神様は「おからすさん」と呼ばれ、女性の下の病気を治してくれるというので、かつては遠くから花柳界の女性たちがタクシーで乗りつけた。祭神は春日社ということになっているが、巷説では、須佐之男命すさのおのみことがある神社かもしれない。

たずらに天斑馬を逆剥ぎにして

投げ込んだために、驚いて機械あめつらめの杵で陰部を突いて死んだ天織女あめおりめがご神体だという。

なかなか霊験あらたかで、月に一度、横を流れる小川が女性の下りもので赤く染まったという。この小川は官営愛知紡績所の水車タービンをまわす導水路である。

この辺りは古来から東海道の渡河点となっており、美川中学校建設の際には布目瓦が出土した。また、古墳も発見されたという。今はさびれた社だが由緒ある神社かもしれない。

●題 字
●タイトルバック
●カツト

岡崎市長
岡崎小
矢作中

中根 鎮夫
香村 敏之
土井 誠司



- * ことばの輪 稲垣 吉彦 1500
文芸春秋
- * こんな先生がほしい 黒柳 徹子他 980
共同通信社
- * 椎の木学校「児童の村」物語 宇佐美 承 950
新潮社
- * 児童の村小学校の思い出 小林かねよ・中野光編 1500
あゆみ出版

- * 上方の笑い 木津川 計 420
講談社

うすっぺらなギャグや流行語が子供の世界にも溢れている。それを逆用する教師もいれば苦々しく思う教師もいる。何となく共感をおぼえる教師だっているに違いない。

いずれにしても末梢的なことばの化粧術の盛んな現代、「笑い」について一考してみる必要があるように思う。教室や教壇に健康な笑いを取り戻すためにもである。

筆者は雑誌「上方芸能」編集長。

○先生は式場で泣いた。学級の卒業生徒氏名を呼び上げるのも、一時途絶えるほどであった。「男のくせに」「昔の卒業式でもあるまいに」とやっかむ御仁もいるだろう。「とにかくあいづらともう少し生活したかった。」と○先生はいう。

春休み、生徒と保護者全員が感謝の会を開いてくれたという。

四月、花祭りとなると、釈迦生誕よりも花見を連想する子が多くなっているという。

戦後の教育改革、核家族化の進行によって、宗教的情操教育は影を薄めてしまったかの感がある。人倫の基本は、敬・愛・信にある。敬虔な祈りと幼少年期の体験について、思うことしきりである。



熱い期待に胸ふくらませて四月を迎えた子供たち。やる気の育て方にしても、勉強の仕方を会得させることにしても、また、仲間づくりの悩みにしても、学級のすべての子供がすがる想いで担任の一挙手一投足をみつめている。

子供の夢や意欲がふくらむか、しぼむか、担任の動き次第である。

ステキな先生になりたいと、今年大勢の新任教師が誕生した。教科指導、学級経営、クラブ指導に手探りで頑張る姿に激励の拍手を送りたい。

「中学生って案外素直なんです。服装もきちんとしていますね。」と新任のK先生。その言葉に岡崎の教育の素晴らしさ、おかざきっ子の素晴らしさを再認識した。

四月、花祭り

オアシス